ベルタ・フォン・ズットナーの『武器を捨てよ！』1892年版におけるテクスト変更

糸井川 修・中村実生

私はたった今、あなたの驚嘆すべき大作を読み終えました。この世界には二千に及ぶ言語があると言われますが――そのうちの千九百九十九語は、私の手にあまるものです――、あなたの見事な作品が翻訳されないでよい言語、つまりその言語で読まれず、考えられずにおかれるべきものはありません。(1)

これは19世紀末にベストセラーとなった反戦小説『武器を捨てよ！』*Die Waffen nieder !*（1889年）を読んだアルフレッド・ノーベルが、友人でもあるその著者ベルタ・フォン・ズットナー（1843–1914）に書き送った手紙（1890年4月1日付）の一節である。ヨーロッパの列強が激しい軍拡競争を繰り広げていた当時、彼女はいち早く世界大戦の勃発を予測し、作家として、この著作をもって戦争を阻止する叫びをあげた。当初望んでいた雑誌・新聞への掲載が断られ、最終的に単行本として千冊出版された『武器を捨てよ！』は、著者と出版社の予想を超える大きな反響を呼び、すぐさま増刷が重ねられて各国語にも翻訳された。日本では1911年（明治44年）に刊行された雑誌『平和』に『武器を捨てよ！』の一部が掲載されたが、まもなく雑誌自体が廃刊となり、翻訳は冒頭部分だけで終わってしまった。(2)

女性初のノーベル平和賞受賞者であるズットナーについては、オーストリアのエッゲンブルクで開催された受賞百周年を記念する国際シンポジウム（2005年）をはじめ、近年ヨーロッパを中心にその思想と行動、著作に対する再評価が行われ、新しい研究書も毎年のように出版されている。このような関心の高まりの中、没後百周年も間近に迫った2011年に、本稿の筆者等も加わるズットナー研究会が『武器を捨てよ！』初の邦訳を上梓した。その序文「日本語版の出版に寄せて」において、著名なズットナー研究者であるピーター・ヴァン・デン・デユンゲン博士は、彼女の著作を今日の国際的な核兵器廃絶運動と関連付けたうえで、「この日本語版の出版は、平和教育、平和研究、武器と戦争のない世界を実現するための絶えざるたたかいに大いに貢献することであろう」と、邦訳出版の意義を語っている。(3)

ところで上記の邦訳では、ドイツ語版と英語版の二冊が底本として使用され、最終的に以下のドイツ語版をもとに共訳者それぞれの原稿間の調整が行われた。

Bertha von Suttner : Die Waffen Nieder ! Eine Lebensgeschichte. hg. und mit einem Nachwort von Sigrid und Helmut Bock. Berlin 1990.

この版は『武器を捨てよ！』の初版を採用したものであるが、巻末には注釈や解説と共に、後の1892年版においてズットナーが施したテクストの変更点が参考資料として付してある。(4) 編者によれば、「この修正は、とりわけ1889年と1892年の間の知性と世界観における明確化の過程を反映するものであり、原作者がすでにこの年代に国民が置かれていた社会的状況を認識し始め、労働運動を諸国民の平和を築くために共闘する決定的なパートナーと見なしていたことを裏付けるもの」(5)とある。

この見解については、上記の版がドイツ民主共和国（東ドイツ）の

Verlag der Nationから出版されたことを考慮する必要もあるが、自然主義の作家と見なされるズットナーは、もともと社会問題に対する関心が強く、諸々の作品のなかで階級闘争、教養批判、女性の解放、国家主義や反ユダヤ主義等を扱っている。[6] そして『武器を捨てよ！』の続編『マルタの子供たち』（1902年）においては、彼女の目指した平和が戦争のない状態を平和とする「消極的平和」ではなく、社会的な不平等を克服する「積極的平和」に近いことも指摘できる。[7]

本稿では、上記のSigrid und Helmut Bockの資料に基づいて、『武器を捨てよ！』の1892年版の変更点（19箇所）を訳出する。[8] それによって日本におけるズットナーと『武器を捨てよ！』に対する関心、理解の向上に少しでも貢献できれば幸いである。

①

〈初版〉　邦訳（上巻）75頁

歴史書に次々と現れる宮廷や戦争の年代記は、その時々の文化状況が生んだ現象をなんの関連づけもなく記述するのみで、それを動かしていた原因についてはなおざりにしています。ふつう歴史家の筆致には昔から英雄礼賛の調子が付き物ですが、それはバックルには無縁でした。

〈1892年版〉　ドイツ語版S. 47

歴史書に次々と現れる宮廷や戦争の年代記は、その時々の文化状況が生んだ現象をなんの関連づけもなく記述するのみで、それを動かしていた原因についてはなおざりにしています。ふつう凶暴な征服者や国の破壊者の生涯を語る歴史家の筆致には昔から英雄礼賛の調子が付き物ですが、それはバックルには無縁でした。

②

〈初版〉　邦訳（上巻）84頁

「(……) ティリング家はどんな家柄かって？　ハノーファーの出自だと思うよ。けれど、彼の父親はもうオーストリア軍に属していた。母親はプロイセンの人だね。君も彼の北ドイツのアクセントに気がついただろう」

〈1892年版〉　ドイツ語版 S. 53

「(……) ティリング家はどんな家柄かって？　プロイセンの出自だと思うよ。けれど、彼の父親はもうオーストリア軍に属していた。母親はプロイセンの人だね。君も彼の北ドイツのアクセントに気がついただろう[(9)]」

③

〈初版〉　邦訳（上巻）229〜230頁

「それができるのは、あなたとほんの数人の人です。でも、ほとんどの人は考えることも、想像することもありません」

〈1892年版〉　ドイツ語版 S. 158

「それができるのは、あなたとほんの数人の人です。でも、ほとんどの人は考えることも、想像することもありません」

「考えることはないね」と彼は繰り返しました。「残念ながら、それがあらゆる不幸の源なのに、ほとんどの人は考えていない」

④

〈初版〉　邦訳（上巻）266頁

例えば、もし戦争擁護者が窮地に追い詰められ、戦争よりも平和が人間にふさわしく、幸福をもたらし、文化を豊かにすると認めなければならなくなると、「おお、そうだ、戦争はたしかに悪だ。だが避けることはできない」と彼は言い、その理由として第一と第二の理由を挙げます。戦争は避けられるということ、そして、それがどのようにして——国際

的な同盟、仲裁裁判所などによって――可能となるかを示されると、「おお、そうだ、戦争は避けられるかもしれない。だが、そうすべきではない」と言い、第四と第五の理由を挙げます。それから平和の弁護人がこのような反対意見を論破し、「それどころか戦争は人を野蛮にし、人間性を奪う」ことを証明すると、「おお、そうだ、それは認めよう。だが……」と言って、第三の理由を持ち出します。この主張も、論破できます。というのも、「木は天まで伸びない」ように自然みずからが配慮しているので、そこに人間の助力が不要なのは自明の理だからです。しかし、これもまた、権力者が戦争を始める本当の理由ではありません。「その通り。だが……」こうして第一の理由に戻るのです。このように論争は果てしなく続きます。

〈1892年版〉　ドイツ語版 S. 184

例えば、もし戦争擁護者が窮地に追い詰められ、第四の理由を主張できなくなり、戦争よりも平和の状態が人間にふさわしく、幸福をもたらし、文化を豊かにすると認めなければならなくなると、「おお、そうだ、戦争はたしかに悪だ。だが避けることはできない」[10]と彼は言い、その理由として第一と第二の理由を挙げます。

戦争は国際的な同盟、仲裁裁判所などによって避けられるということが示されると、「おお、そうだ、確かに可能かもしれない。だが、そうすべきではない」と言い、第五の理由を挙げます。

それから平和の弁護人がこのような反対意見を論破し、それどころか戦争は人を野蛮にし、人間性を奪うことを証明すると、「おお、そうだ、それは認めよう。だが……」と言って、第三の理由を持ち出します。

この主張は、戦争を称賛する人々が用いれば、それだけで極めて不誠実なものとなります。それは、むしろ戦争を忌み嫌いながらも、この恐ろしい現象にひとつの根拠、いわば自然の摂理を擁護する理由を見つけ出そうとする人々に役立つものです。心の中で戦争を愛し、それを維持

しようと努めている人々は、遥か後の世代の息災を顧慮してそうしているのではありません。将来の人類が直面するかもしれない物質欠乏の危機を回避するために、殺人や意図的な疫病の蔓延、貧困化によって現在の人類を暴力的に減らしたりは、きっとしないでしょう。もしも全体を繁栄させるために人間が介入して人口過剰を防ぐ必要があるならば、戦争を行うよりも、より直接的な方法があるでしょう。つまり、この主張はただの口実にすぎないのですが、これを用いれば相手はあっけにとられるので、大抵はうまくいくのです。このことはとても学術的で、実際に人間のことをよく考えているように聞こえます——数千年後に暮らす我々の愛する子孫たちのために、我々はどうしても自由に動ける空間を作ってやらねばならない、ただそれだけの考えだ、と言うのです——この第三の理由は、多くの平和の守護者を困惑させます。このような自然科学的かつ社会経済学的な問題について知識を持っているのは、ほんのわずかの人だけです。死滅と出生のバランスは、自ずと保たれます。そして自然は、数が増え過ぎるのを防ぐために、生物に絶滅の危機をもたらすのではありません。その逆に、大きな危機にさらされた生物の出生率を高めるのです。このことは恐らくほんのわずかの人しか知りません。例えば、戦後は出生数が増え、それによって失われた数が補われます。平和が長く続いた豊かな時代には、出生数は減少します——ですから、この人口過剰という妄想的な危機が起きることは、そもそもありません。しかし、これらはすべて理解されていないのです。この有名な第三の理由が正しいはずはないこと、そして相手側もまともには信じていないことは、ただ直観的に感じられているに過ぎません。そこで「木は天まで伸びないように配慮されている」という、あの古い諺を引用すれば足りると思うのですが、そのような結論は権力者の念頭にはありません……。

「その通り。だが……」こうして第一の理由に戻るのです。

このように論争は果てしなく続きます。

⑤

〈初版〉　邦訳（下巻）80頁

しかし、私は自分の記憶だけに頼ろうとは思いません。私の理解力は、この出来事の重みには到底足らないのです。伝えたいことを語るために、私はあの光景を目撃した他の証人たち、ジーモン夫人やブラウアー医師、そしてザクセン人で野戦病院の監督官ナウンドルフ医師の話も付け加えようと思います。

〈1892年版〉　ドイツ語版 S. 255

しかし、私は自分の記憶だけに頼ろうとは思いません。私の理解力は、この出来事の重みには到底足らないのです。伝えたいことを語るために、私はあの光景を目撃した他の証人たち、ジーモン夫人やブラウアー医師、そしてザクセン人で野戦病院の監督官ナウンドルフ医師の話も付け加えようと思います（この最後に挙げた人物の、衝撃的な本『赤十字のもとで』[11]をご覧になって下さい）。

⑥

〈初版〉　邦訳（下巻）166頁

「もちろんよ。もし豹を鳩に見立てれば、豹だって実におとなしい動物だわ」と、私はそっと呟きました。

従軍牧師は、よどむことなく滑らかな弁舌を繰り広げました。

〈1892年版〉ドイツ語版 S. 321

「もちろんよ。もし豹を鳩に見立てれば、豹だって実におとなしい動物だわ」と、私はそっと呟きました。彼が引き合いに出した詩についても、本当はボーデンシュテット[12]の詩で反論したかったのです。

汝らは戦争と英雄の栄誉をいたく好み、
いかにそれを告げ知らせんと欲するか。
ただ、大砲の喉元から説かれし
汝らのキリスト教については黙せよ。
汝ら勇気の証を望むるならば、
古(いにしえ)の異教徒の如く戦うべし。
いかに多く血を注ぐ必要があれども、
救い主について語ることなかれ。
今なお信仰厚きトルコの軍勢は、
アラーの栄誉がため戦(いくさ)に剣を振るう。
然れども我らにオーディン[13]はすでになく、
ヴァルハラの神々は死せり。
悉く思いしままに汝らの欲するところをなせ、
此岸においても彼岸のごとくに。
我が憎むは、
戦を好むナザレ人[14]の偽善なり。

しかし目の前の「戦を好むナザレ人」は、私の心に浮かんでいるものが見えず、よどむことなく滑らかな弁舌を繰り広げました。

⑦

〈初版〉　邦訳（下巻）170頁

この点で「いかにも」大臣は、いつも夫に賛同するとは限りませんでした。なぜなら大臣は外交官や官僚として経験が豊富で、いわゆる「現実的政治」を行うことに慣れていたのです。個人のごく身近な利害にのみ関わることや、社会学の理論的問題については、何も知りませんでした。

〈1892年版〉　ドイツ語版 S. 324

この点で「いかにも」大臣は、いつも夫に賛同するとは限りませんでした。なぜなら大臣は外交官や官僚として経験が豊富で、いわゆる「実務的政治」や「現実的政治」[15]を行うことに慣れていたのです。個人のごく身近な利害にのみ関わることや、社会学の理論的問題については、何も知りませんでした。

⑧

〈初版〉　邦訳（下巻）189〜190頁

フランス政府は一八六三年、普遍的な軍備縮小と将来の戦争防止の礎（いしずえ）を築く会議の開催を、列強に提案した。

この提案は、どの政府からも賛同を得られなかった。

〈1892年版〉　ドイツ語版 S. 339

フランス政府は一八六三年、普遍的な軍備縮小と将来の戦争防止の礎（いしずえ）を築く会議の開催を、列強に提案した。

当時、私の記録ノートの書き込みは、なんとわずかでしょう！　こうした状況は後に変わりました。しかし、これらは世界平和の可能性がすでに昔から考えられていたことを証明しています。ただ、その声が上がるのは、ほんの時折、それも長い間をおいてのことです――そして注視されないだけでなく、大抵は耳にされることもなく、消えてゆくのです。どのような発見、進歩、成長があっても、変わることはありません。

遠くから春が近づけば、
さえずりが、そこかしこから聞こえる。
そしてこの地に春が訪れれば、
高らかなさえずりは、大きな合唱となる。
そこかしこで囁（ささや）きが長く続いたからには、

時は至り
皆がすぐに声を合わせる。

（メルツロート）[16]

⑨

〈初版〉　邦訳（下巻）196頁

ナポレオン三世の願いも、根本的に同じものでした。私たちは皇帝に極めて近い人たちとたくさんの交流があり、皇帝が内密に話された政治的思案を知る機会が十分にありました。皇帝は現在の平和を望むだけでなく、列強に対する普遍的な軍備撤廃の提案を計画されていました。

〈1892年版〉　ドイツ語版 S. 344

同じことを――少なくとも自ら主張するところによれば――ナポレオン三世も望んでいました。[17] 私たちは皇帝に極めて近い人たちとたくさんの交流があり、皇帝が内密に話された政治的思案を知る機会が十分にありました。皇帝は現在の平和を望むだけでなく、列強に対する普遍的な軍備撤廃の提案を計画されていました。

⑩

〈初版〉　邦訳（下巻）210頁

そこで周辺のヨーロッパ諸国の内閣は、この件に関して見解を求められました。どの国も平和を熱望していると表明しました。ドイツでは、民衆の側から生まれた声明が発表されました。リープクネヒトも署名したその声明には、「ドイツとフランス間の戦争を考えること自体が犯罪である」と述べられていました。

〈1892年版〉　ドイツ語版 S. 355

そこで周辺のヨーロッパ諸国の内閣は、この件に関して見解を求められました。どの国も平和を熱望していると表明しました。ドイツでは、民

衆の側から生まれた声明が発表されました。リープクネヒトも署名したその声明には、「ドイツとフランス間の戦争を考えること自体が犯罪である」と述べられていました。この機会に耳にしたことを、私は自分の平和のプロトコルに書き入れることができました。「数十万の人々からなる偉大な連帯が存在している。彼らは、階級と国家が抱いているあらゆる偏見をなくすことを目標に掲げている」

⑪

〈初版〉　邦訳（下巻）216頁

それならば事実としてはプロイセンの方が正しく、プロイセンはただ国を守るために戦争を強いられたと見なすべきではないでしょうか？ ヴィルヘルム国王が七月十九日の議会の式辞で述べたことは、まったく理に適っていました。

〈1892年版〉　ドイツ語版 S. 359

それならば事実としてはプロイセンの方が正しく、プロイセンはただ国を守るために戦争を強いられたと見なすべきではないでしょうか？　そして、先頃はまだ反目し合っていたドイツ人同士が今や心をひとつにして集結したのは、感動的ではなかったでしょうか？　ヴィルヘルム国王が七月十九日の議会の式辞で述べたことは、まったく理に適っていました。

⑫

〈初版〉　邦訳（下巻）219頁

「(……) もしも国民がそのことを理解するならば、もしも国民が理由のない人殺しを拒むならば、戦争は起こらなくなるだろう」

〈1892年版〉　ドイツ語版 S. 362

「(……) もしも国民がそのことを理解するならば、もしも国民が理由

のない人殺しを拒むならば、戦争は起こらなくなるだろう」

そしてエルネスト・ルナンは、それゆえ自分の考えをこう述べました。

「我々科学者が五十年間築き上げようと努力してきたものすべてが、すなわち、民族と民族の間の共感、相互理解、実りある協力が、一撃で崩れ落ちてしまったと考えると、胸が引き裂かれるのではないだろうか。このような戦争が、なんと真実への愛を殺してしまうことか！　ひとつの民族のなんという嘘、なんという中傷が、今や新たなこれからの五十年間において、もう一方の民族の記憶に執拗にとどめられ、両者を予測もつかぬほどの長きに渡って互いから引き離すのだろうか！　ヨーロッパの進歩の、なんという停滞だろうか！　これらの人びとが一日で引き倒したものを、我々は今後百年の間は再び打ち立てることはできないのではなかろうか？」[18]

⑬

〈初版〉　邦訳（下巻）259頁

今や、この平和の作業のために手を携(たずさ)えているのは、かつての貧しい鍛冶屋(かじや)のような、権力と地位のない人たちばかりではありません。国会議員、司教、学者、評議員、大臣らが名を連ねています。そのことは、まだ多くの人には知られていませんが、私は一部始終を知っています。

〈1892年版〉　ドイツ語版 S. 392

今や、この平和の作業のために手を携(たずさ)えているのは、かつての貧しい鍛冶屋(かじや)のような、権力と地位のない人たちばかりではありません。国会議員、司教、学者、評議員、大臣らが名を連ねています。さらに、その支持者が数百万を数えているあの政党、その綱領における最重要の要求のひとつとして「諸民族の平和」を上位に置いている労働者と民衆の政党が、それに加わっています。[19] そのことは、まだ多くの人には知られていませんが、私は一部始終を知っています。

⑭

〈初版〉　邦訳（下巻）262頁

さらに、この議員たちは、毎年ヨーロッパのどこかの都市に集うことを約束しました。そして、あらゆる不信や紛争の実態を検討し、公正で平和的な解決を目指して政府に働きかけを行うのです。どんなに希望を失ったペシミストでさえも、きっと認めるにちがいありません。これは将来、戦争が人類史における最も愚(おろ)かで犯罪的な汚点であると見なされる時代が到来する兆(きざ)しです。

どうか私の心からの尊敬の気持ちをお受け取り下さい。

敬具

ハドスン・プラット

〈1892年版〉　ドイツ語版 S. 393

さらに、この議員たちは、毎年ヨーロッパのどこかの都市に集うことを約束しました。そして、あらゆる不信や紛争の実態を検討し、公正で平和的な解決を目指して政府に働きかけを行うのです。これは将来、戦争が人類史における最も愚(おろ)かで犯罪的な汚点であると見なされる時代が到来する兆(きざ)しです。

どうか私の心からの尊敬の気持ちをお受け取り下さい。

敬具

ハドスン・プラット

ハドスン・プラットが示唆した列国議会同盟の会議――歴史に残る第一回の大会が当時招集されました――では、ジュール・シモンが議長を務めました。ここで彼の開会演説の一部を引用します。

これらの部屋に様々な国々から権限を持って集まった平和愛好家の代表者を前にして、私は喜びに堪えません。ある程度の人数が集まってくれました。私は、多くの人たちに集まってもらいたい、あるいはまた、

人数は比較的少なくてもよいが、自由参加の会議ではなく――公式な外交会議となればよい、と思っていました。しかし、法の力を以てして行えないことに対しても、我々は実効性ある寄与ができます。様々な国家の代表として我々は、存在する中で最大の力――つまり有権者から我々に委ねられた力――を最大限に立派に行使できるのです。皆さんは私たちの国の多くの者が平和を好んでいることを知らねばなりません。さあ、フランスの国民と声を揃える私に、皆さんのすべてに対して、心の底から発せられる歓迎の言葉を述べさせてください（……）

この会議に出席したデンマークとスペイン、それにイタリアの議会の議員は、次の会期中に、各自の政府に国際仲裁裁判所の設置を提案する決断をしました。次回の列国議会同盟の会議は、一八九〇年七月に開催されることになっています。

⑮

〈初版〉　邦訳（下巻）262頁

その言葉を国民に公布した気高い人は、瀕死（ひんし）の状態から最後の力を振り絞り、王笏（おうしゃく）をシュロの枝のごとく振るおうとしました。しかし重い病に伏して力を発揮できないまま、まもなくすべてが終わりました……

〈1892年版〉　ドイツ語版 S. 393

その言葉を国民に公布した気高い人は、瀕死（ひんし）の状態から最後の力を振り絞り、王笏（おうしゃく）をシュロの枝のごとく振るおうとしました。しかし重い病に伏して力を発揮できないまま、まもなくすべてが終わりました……

彼の後継者――激しい熱情家で大変な野心家――が、平和という理想にも熱狂するのでしょうか？　可能性は全くありません。[20]

⑯

〈初版〉　邦訳（下巻）264頁

「私は、それを期待しているのよ。もしもこの痛みが、たとえ数人の心にでも、ここに描かれた不幸の原因に対する強い嫌悪を呼び覚ましてくれたらと思っているの。そうなれば、私が苦しんだことも無駄にはならないわ」

〈1892年版〉　ドイツ語版 S. 395

「私は、それを期待しているのよ。もしもこの痛みが、たとえ数人の心にでも、ここに描かれた不幸の原因に対する強い嫌悪を呼び覚ましてくれたらと思っているの。そうなれば、私が苦しんだことも無駄にはならないわ」

「でもこの問題のあらゆる側面にも光を当てられたのですか、あらゆる議論を尽くされたのですか、戦争の精神の複雑な根源を分析し、科学的な基盤を十分に構築されたのですか？　それに――」

「お前は思い違いをしているのかい？　私に言うことができたのは、ただ自分の人生の中で自分の限られた体験と感情の範囲内で起こったことだけだわ。この問題のあらゆる側面に光を当てる？　もちろん違うわ！　例えば、裕福で身分が高い私に、戦争が民衆の多くにもたらす苦しみの何が分かるの？　私は兵営暮らしの苦労と悪影響の何を知っているの？　それに科学的な基盤？　どうしたら私が、経済的社会的問題に精通するようになるのかしら？　そしてこれが――私の知る限りでは――最終的にあらゆる変革を決定するのね……。これらの頁に書き綴られているのは、過去と未来の国際法の歴史ではないわ――ただ、ある人生の物語に過ぎないのよ[21]」

⑰

〈初版〉　邦訳（下巻）269頁

「実際に閣下は、熱狂に駆られた兵士たちが、心の底から平和への誠実な意志を持っていると思われますか？　軍備撤廃、国家連合、仲裁裁

判所など、彼らは戦争を脅(おびや)かすものについては、どれも聞きたがらないのではありませんか？（……）」

〈1892年版〉　ドイツ語版 S. 398

「実際に閣下は、熱狂に駆られた兵士たちが、心の底から平和への誠実な意志を持っていると思われますか？　軍縮、国家連合、仲裁裁判所など、彼らは戦争を脅(おびや)かすものについては、どれも聞きたがらないのではありませんか？（……）」

⑱

〈初版〉　邦訳（下巻）269〜270頁

「（……）あなた方はこのようなことに賛成したのです、ただ臆病者(おくびょうもの)と見られたくないためだけに。人は利己的な理由だけで、徴兵検査に疑念を持つのではありません。戦争に反対するように仕向けるほど、いったい人間のエゴイズムは巨大なのでしょうか？　もちろん、そうです。エゴイズムは巨大です。あなた方はそろって、かわいい自分が臆病者扱いされるのを恐れ、十万人の同胞を破滅に追いやろうとするのですから」

〈1892年版〉　ドイツ語版 S. 399

「（……）あなた方はこのようなことに賛成したのです、ただ臆病者(おくびょうもの)と見られたくないためだけに。人は利己的な理由だけで、徴兵検査に疑念を持つのではありません。そもそも皆さんがそこにいるのは、国民の意思を代弁するためではないのですか？　そして国民が望んでいるのは、生産的な仕事です、望んでいるのは重荷からの解放です、平和なのです……」

⑲

〈初版〉　邦訳（下巻）272頁

「（……）未来に著されるすべての歴史書において、最高の名誉と栄光

に輝く行為、つまりあらゆる軍備の撤廃を成し遂げる君主または政治家が、もうどこかにいるのかもしれません……私たちはすでに、ひとつの時代の入口に足を踏み入れたのです。それは人類が人間性を高め、フリードリヒ・ティリングがよく語っていた、あの気高い人間性に到達する時代です……お母さま、あなたが心から悼(いた)み、永遠に忘れることのできない最愛の人を偲(しの)んで、私はこの杯を飲みほします。私の考えも、今の私があるのも、すべてその人のお陰です。そして、この杯はもう他の乾杯には使いません」

〈1892年版〉　ドイツ語版 S. 401

「(……) 未来に著されるすべての歴史書において、最高の名誉と栄光に輝く行為、つまりあらゆる軍備の撤廃を成し遂げる君主または政治家が、もうどこかにいるのかもしれません……国家のエゴイズムはかくも欺瞞的に正当性を装いますが、それに力を貸しているあの狂気は、すでに崩れ落ちています――つまり、一方の損害は他方の利益を促進するという狂気です。正義があらゆる社会生活の基盤として有用であるという認識は、理解され始めています……そしてこのような認識の中から、人間性が、フリードリヒ・ティリングがよく語っていた、あの気高い人間性が咲き誇るでしょう……お母さま、あなたが心から悼(いた)み、永遠に忘れることのできない最愛の人を偲(しの)んで、私はこの杯を飲みほします。私の考えも、今の私があるのも、すべてその人のお陰です。そして、この杯はもう他の乾杯には使いません」

注

(1) Bertha von Suttner : Lebenserinnerungen. hg. und bearbeitet von Fritz Böttger. Berlin DDR 1968 [6. Auflage 1979]. S. 219.

(2) ベルタ・フォン・ズットナー：『武器を捨てよ！』(下巻)、ズットナー研究会訳、新日本出版社、2011年、299–302頁、「あとがき」(山根和代)

参照。

(3) ベルタ・フォン・ズットナー：『武器を捨てよ！』（上巻）、ズットナー研究会訳、新日本出版社、2011年、3－8頁、「日本語版の出版に寄せて」（ピーター・ヴァン・デン・デユンゲン）参照。

(4) Bertha von Suttner : Die Waffen Nieder ! Eine Lebensgeschichte. hg. und mit einem Nachwort von Sigrid und Helmut Bock. Berlin 1990. S. 478ff. ここでは「内容の本質的な変更」部分だけが取り上げられており、文体の変更については考慮されていない。

(5) Ebd., S. 478.

(6) Edelgard Biedermann : Nicht nur *Die waffen nieder !* : Bertha von Suttner. In : Deutschsprachige Schriftstellerinnen des Fin de siècle. Herausgegeben von Karin Tebben. Darmstadt 1999. S. 320ff.

(7) 糸井川修：「ベルタ・フォン・ズットナーの『武器を捨てよ！』と『マルタの子供たち』」愛知学院大学『教養部紀要』第58巻第4号、2011年、9頁参照。

(8) 併記した初版の邦訳は、『武器を捨てよ！』（上巻）（下巻）、ベルタ・フォン・ズットナー著、ズットナー研究会訳、新日本出版社、2011年より、巻と頁数を付して引用し、1892年版において削除あるいは変更された部分には波線を付した。1892年版の変更点の邦訳は初版の引用に加筆して作成し、変更・追加部分には下線を付した。またドイツ語版の頁数は、底本として使用したSigrid und Helmut Bock編ドイツ語版の該当箇所の頁数である。

(9) これはイタリア独立戦争（1859年）が終わってから間もない頃の会話である。この時点でハノーファーはまだプロイセンに併合（1866年）されていないが、ドイツ語圏・ヨーロッパを越えて全世界に広がった読者の事を考え、より分かりやすい表現を用いたものと推測できる。

(10) この論争の場面で、ドイツ語の原文に直接話法を示す引用符はないが、邦訳では読み易いように数ヶ所を直接話法で訳してある。従って1892年版の訳についても、同様の訳し方をした。

(11) August Julius Naundorff (1821–1907) : Unter dem rothen Kreuz : fremde und eigene Erfahrungen auf böhmischer Erde und den Schlachtfeldern der Neuzeit. Leipzig 1867.

(12) Friedrich Martin von Bodenstedt（1819–1892）ドイツの作家。

(13) オーディンは、ゲルマン人諸族の間で崇拝された北欧神話の主神で、「戦死者の館」を意味する天上のヴァルハラ宮殿に住む。平凡社『世界大百科

事典』参照。

(14) キリスト教徒のことを指す。

(15) 初版の die sogennannte » praktische Politik « の後に、1982年版では oder » Realpolitik « が追加された。どちらも「現実的政治」に近いニュアンスであると思われるが、あえて訳し分けるとすると、このような表現になるだろうか。

(16) 詩人の名前と思われるが、出典等については不明。

(17) 初版の内容からは、ナポレオン三世の平和主義に対するズットナーの信頼が読み取れたが、1892年版では、ナポレオン三世に対する彼女の評価に、懐疑的な方向への変化があったことが窺える。

(18) 普仏戦争がもたらしたのは、独仏両国間の相互不信と憎しみだった。このことは、後の第一次世界大戦、そしてさらには第二次世界大戦で両国がまみえる遠因となっている。ズットナーはここにルナンの言葉を加筆することで、普仏戦争後の状況に対する憂慮を表明したのかもしれない。

(19) 社会主義に関心を抱いていたズットナーはヴィルヘルム・リープクネヒトに著作を送り、『武器を捨てよ！』は1892年に社会主義政党の機関紙『前進（Vorwärts)』に転載された。それによって彼女は「赤いベルタ」と中傷される。Nachwort von Sigrid und Helmut Bock. S. 450ff. 及び Brigitte Hamann : Bertha von Suttner. Ein Leben für Frieden. München 1986. S. 410. 参照。

(20) 早世したフリードリヒ三世の跡を継いだドイツ皇帝ヴィルヘルム二世に対する憂慮。ズットナーの憂慮を裏書きするように、ドイツ皇帝の「野心」が第一次世界大戦の一因となる。

(21) 初版発行以来の『武器を捨てよ！』に対する批判を考慮しての加筆、ズットナーの弁明と思われる。